

まんのう町教育委員会だより

爽そうふう風

子どもの健やかな成長を願って

Vol. 28

令和3年【2021】

12月1日 発行

特集

こども園

広がる豊かな遊びの世界



Contents

P.6～7 園・学校ウォッチング
琴南小学校・満濃南こども園

P.8 ホットニュース
P.9 シリーズ「声」

P.10～11 人権週間に寄せて



(長炭こども園の園庭)

こども園 広がる豊かな遊びの世界

親子のふれあい

教育長 三原 一夫

毎日曜日の午前中、特段の用事がないときは、向こう1週間分の食料の買い出しに妻に同行することになっている。とりわけ力が強いわけではないが、荷物運びである。お米やジャガイモ、タマネギの類をカートに乗せて運ぶ仕事である。このほか細々としたもので、私には気がつかないものがたくさんある。

そんなある日、私たちの近くで、母親と4、5歳の女の子が、買い物を楽しんでいた。スーパーで買い物をするルートは、皆だいたい同じ傾向があるので、彼女たちと一緒に歩くことになった。何となくその親子の会話が耳に入ることになった。「お母さん、これ美味しそうだね」とか「パパのビール切れていたよね」、また、母親が「マスカット、ほしいけど、いい値段だから今日はやめとこうか」と、話し合っている。話の中心が自然で温かく無理がなくて、また、家族のことを頭に描いて買い物を楽しんでいる。温かい家族の日常が溢れていて頼もしくなる。

何気なく、親子で言葉を掛け合うということが、人間関係を豊かにする基になっていると思う。特に幼児期は、親子の関わりを省いては、人間信頼とか人間理解とかいった、根っこの部分が育たないことになる。子どもにはこんなこと話しても理解できないから黙っておく、というのはいけないのではないか。少し難しくってわからないことも、優しい言葉で語りかけてあげたいものである。

こども園を参観する機会がよくあるが、先生方が子どもたちに語りかけている場面に出くわす。一人ひとりの子どものことを考えて、何を話そうかいつも考えている。言葉をかけようとすると、その子どもの心の中をのぞかないと、言葉が軽くなるものである。子どもの勇気や元気が出るような言葉を探しているのである。寡黙にならないで、子どもとはいつも多弁でありたいものである。

人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ

何でもみんなで分け合うこと。

ずるをしないこと。

人をぶたないこと。

使ったものは必ずもとのところに戻すこと。

ちらかしたら自分で後片づけをすること。

人のものに手を出さないこと。

誰かを傷つけたら、ごめんなさい、ということ。

食事の前には手を洗うこと。

トイレに行ったらちゃんと水を流すこと。

焼きたてのクッキーと冷たいミルクは体にいい。

釣り合いの取れた生活をする事 ―

毎日、少し勉強し、少し考え、少し絵を描き、歌い、踊り、遊び、そして少し働くこと。

毎日かならず昼寝をすること。

おもてに出るときは車に気をつけ、手をつないで、はなればなれにならないようにすること。

不思議だな、と思う気持ちを大切にすること。

発砲スチロールのカップにまいた小さな種のことを忘れないように。種から芽が出て、根が伸びて、草花が育つ。

どうしてそんなことが起きるのか、本当のところは誰も知らない。でも、人間だっておなじだ。

金魚も、ハムスターも、二十日鼠も、発砲スチロールのカップにまいた小さな種さえも、いつかは死ぬ。

人間も死から逃れることはできない。

ディックとジェーンを主人公にした子供の本で最初に覚えた言葉を思い出そう。何よりも大切な意味を持つ言葉。

「見てごらん」

『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ 決定版』
ロバート・フルガム：著 池央耿：訳 (河出書房新社)より

まんのう町立の幼稚園・保育所がすべて「認定こども園」に移行して、今年で6年目に入りました(仲南こども園は1年早く移行)。6つのこども園には、今日も目を輝かせて遊びに没頭し、生き生きと園生活を楽しむ子どもたちの姿があります。





「非認知能力」とは？

幼児期には、大切な**3つの育ち**があります

- 生活習慣
- 文字・数・思考
- 学びに向かう力

この中の『学びに向かう力』が、**非認知能力**とほぼ同じ力であると言われています



生活習慣

トイレ、食事、あいさつ、片づけなど、生活していくために必要な習慣

3つの育ち

文字・数・思考

認知能力

文字や数の読み書き、順序の理解など、小学校段階での学習につながる力

学びに向かう力

非認知能力

目標の達成に必要な力、情動の抑制、他者との協同などにかかわる力

今、注目される力

今、この「非認知能力」を幼児期に育成することの重要性が、世界的な共通認識になりつつあります。「非認知能力」は、OECD（経済協力開発機構）では「社会情動的スキル」と言われています。

「非認知能力」は、学力テストや成績で測定できる「認知能力」以外の幅広い能力や姿勢すべてを含むものですが、目に見えにくく、数値化することが困難です。しかし、この力を幼児期に十分に育むことが、小学校以降の主体的に学ぶ姿勢や多様化した社会を生き抜いていく力につながると言われています。

具体的には、左のような要素を含んでいます。

好奇心

分からないことについて、「なぜ？」「どうして？」とまわりに質問ができる など

協調性

遊びなどで友だちと協力することができる など

自己主張

自分が何をしたいのかを言うことができる など

自己抑制

自分がやりたいと思ってても人の嫌がることはがまんできる など

がんばる力

物事をあきらめずに挑戦することができる など

**遊び込む経験が
非認知能力を育てます**

分かってきたこと

- 「非認知能力」は、それを育てることを目的にするものではなく、充実した豊かな遊びの結果として身についていくものです。
- より多く「遊び込む経験」をした子どもの方が、「非認知能力」が高いです。
- 幼児期に「非認知能力」を十分に伸ばしておくと、小学校以降、「非認知能力」はもちろんのこと、文字・数などの「認知能力」も、雪だるま式に大きくなっていきます。

認知能力と**非認知能力**は、
絡み合うように伸びていきます

幼児期にできた雪玉（非認知能力）が小さくバランスが悪くと、うまく転がりません。バランスがよく大きい雪玉であれば、よく転がって大きい雪玉となります。



遊びのなかで育まれる

学びの芽生えと非認知能力

～子どもの豊かな未来へとつながる 2つの力～



「学びの芽生え」とは？

こども園での生活のほとんどを占めるのは「遊び」です。「遊び」は、子どもたちが意欲を持って周りのものに能動的にかかわっていく活動のことで、大人がリラックスして余暇を楽しむ「遊び」とは全く異なります。

「遊び」は、こども園の子どもたちにとって、「学び」そのものだと言っても過言ではありません。楽しいことや好きなことに集中することを通して、意識することなく、様々なことを学んでいくのです。

それを、「学びの芽生え」とよんでいます。

保育者の
温かく受容的な
かわり

夢中になって遊びに没頭し**遊び込む経験**が、

豊かな「**学びの芽生え**」を

育みます



自由に遊べる
豊かな環境



※**遊び込む経験**とは、
例えば

- 自分なりに工夫を加えたり試行錯誤を繰り返したりしながら遊びを発展させ、最後までやり遂げる経験
- 自分のやりたいことや思いを、想像力や集中力をもって、たくましく実現させていこうとする経験

このように、子どもが主体的に遊びに入り込む経験のことです。

遊びを通して育まれた **たくさんの「学びの芽生え」が
小学校で教科等を学ぶ土台となるのです**

〔参考：幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会（第1回）議事録・資料4-1/4-2
これからの幼児教育2015・2016（ベネッセ教育総合研究所）〕

琴南小学校では、まんのう町学校教育実践指針の『自立・向かう教育』をもとに、「自分で考え、判断し、行動できる子どもの育成」をめざして、子どもたちの自主的・主体的な活動を大切にしています。

全校・異学年団の活動

琴南っ子体力づくり運動プロジェクト

異学年で楽しく運動することで免疫力を高めるだけでなく、運動の楽しさを知ったり、異学年の友だちと仲良くなったりして、毎日みんなが元気に登校できることをねらうに、『琴南っ子 体力づくり運動プロジェクト』を昼休みに実施しています。これは、児童会役員から提案があつて始めたものです。児童会役員選挙の演説会で、当選したら実現したいと言っていた公約の一つです。



ネットの的をねらって



参加した子にはスタンプを

全校生が集まると密になるので、それを避けるため、挑戦する曜日を学年ごとに分け、なおかつ異学年の子どもたちが参加できるようにしています。運動前後の消毒はもちろん、種目も工夫されています。役員が全校生のことを考えて、自主的に計画を立ててくれたおかげで、参加した子どもたちは楽しく仲よく運動することができています。

自分で考え、判断し 行動できる子に

琴南小学校



そばづくり体験活動
5年目になるそばづくり。今年も、2学期の初めに行った種まきから地域の方の指導をいただきながら、3年生から6年生までの40名が取り組んでいます。昨年同様、密を避けるために、3年生と6年生、4年生と5年生のペアで活動しています。指導者に依頼して、活動の説明を必要最小限にしていたき、それぞれの活動をできるだけ子どもたちに任せるようにしました。



石をどんどん拾おう



ここに土をかけて

活動後の振り返りでは、「始めはうまくできなかったけど、6年生に教えてもらってできた」「○○さんがしているのを見て、石拾いもがんばりました」などの感想を発表していました。

学年の活動

感染症予防ポスターづくり

4月に6年生が学級で話し合い、感染症予防を訴えるポスターを作りました。校内のあちこちに掲示して呼びかけた結果、全校生が意識して生活することができました。



ポスターで呼びかけ

「廊下を歩こう」の呼びかけ

7月の生活目標「廊下を正しく歩こう」を呼びかけるために、4年生が、廊下に正しい歩行を呼びかける人形を作っていました。6年生がポスターを作った呼びかけの参考に話し合い、ペットボトルで人形を作ることを決めたそうです。おかげで、廊下を正しく歩く人が増えました。



ペットボトルで呼びかけ

もちろん、授業でも、子どもたちは、友だちや先生の話をしっかりと聴き、学び合いながら主体的に学習に取り組むことが増えています。今後、子どもたちに任せて、自分たちで判断して学習や活動を行うことができるように、教員は「待ち」の姿勢を大切にして支援を続けていきます。

今年度は「楽しさいっぱい 笑顔いっぱい」の満濃南こども園「をめぐり、安心・安全で園児一人一人が心豊かな園生活を送れるように取り組んでいます。10月現在、ここにこの棟の0・2歳児は82名、わくわく棟の3・5歳児は80名の子どもが在籍しています。



いないいないばあ!

おひげが
できちゃったよ

わくわく棟では
一人一人の思いに寄り添い、子どもたちが友だちとつながりあいながら、主体的に園生活を送れるようにしています。

大好きな生き物たち

毎日、卵から成長するアゲハチョウの観察をしていた3歳児。ある朝、「アゲハになつてー」と大喜び。クラスで話し合った結果、「飼育ケースがせまそうやけん、にがしてあげたら」という友だちの言葉に賛同して、空へ飛びたつアゲハチョウをみんなで見送りました。生き物が大好きな4・5歳児。ダンゴムシの赤ちゃん誕生の瞬間に遭遇し、「ちいさい」「かわいい」と小さな命の誕生に感動していました。

変化を楽しむ子どもたち

7月上旬、3・5歳児は、新しい園庭にクレンで部品が運ばれ、大型遊具が組み立てられていく様子を興味津々で見学しました。現在の園庭にあった太鼓橋やログハウスも新しい園庭に移されました。

新しい園庭で遊ぶことを楽しみにしていた子どもたち。完成初日には、さっそく、はりきって遊んでいました。わくわく棟周辺は、今後も変化を続けます。それを受け入れ、その時々を楽しんでいる子どもたち。その姿から私たち職員も学びながら、日々の教育・保育を考えていきたいと思っています。



みてっすべるよ

来年度秋の園舎統合に向けて、わくわく棟では工事が本格的に始まっています。全職員が保護者と協力しながらスムーズな移行ができるようにしていきたいと思っています。



心を合わせた運動会 ～小学生がベランダから応援～

その時々を楽しみ 心豊かな園生活に 満濃南こども園



ふれあい運動会
10月初旬、感染予防対策をして、「ふれあい運動会」を実施しました。こども園になって6回目となる、この年にこの棟だけの運動会も、今年が最後となりました。

昨年度は、ビデオ撮影をした映像を保護者に見ていただきました。「今年は、実施できてよかった」という声が、多くの保護者から聞かれました。

運動会当日、子どもたちは保護者とふれあいながら、楽しそうに参加していました。



シリーズ『声』

第14回 教育現場を支える指導主事

「指導主事」とは、学校やこども園の教育活動が円滑に行われるよう指導や助言を行うことを職務として教育委員会事務局におかれる職です。今回は、まんのう町教育委員会で仕事をする2名の指導主事の「声」を聞きました。

初めて参加した指導主事研修会の講話で、「現場を離れパソコンに向かう仕事が多くなってきたと思うが、そのパソコン画面の向こうには必ず子どもたちが存在する」という話を聴きました。当時はとても素直に受け入れられなかった言葉でしたが、今は理解できます。ここでの学びをこども園に返していけるよう、さらに自己研鑽に努めながら、研修を進めていきたいと思っています。また、まんのう町のこども園の保育が充実し、そこで働く先生たちも保育を楽しめるよう、サポートしていきたいと思っています。



学校教育課 指導主事（こども園担当） 坂本 菜々子

思いをつなぐ

こどもたちの未来を共に思い描きながら

指導主事として教育委員会に来て、3年目になります。子どもと直接ふれ合うことのない生活は経験したことがなく、ここ何年かすべしのか、自分に何ができるのかもわからず、不安なスタートでした。同時に、こども園に勤務していたときは自分の園のことで毎日忙しく過ごし、自分自身が学ぶ努力をしてこなかったことを深く反省することになりました。今、これまでとは違う立場でこども園を訪ねたり、まんのう町のこども園に関わってくださっている香川大学の先生方から直接お話を伺ったり、研修会で国や県がめざす保育の方向性について知識を得たりすることは、私にとって大変貴重な学びの機会となっています。

こども園を訪ね、保育を参観したり園の先生方と一緒に保育について考えたりする中で、園や先生方の悩みや課題を知ることができました。また、小学校や中学校を訪問する機会もあり、それぞれの学校がめざす子ども像や授業の在り方等を知る中で、全ての教育の基礎、人格形成の基礎を担う就学前教育の重みを、より強く感じることができました。

ここに来なければ気づかなかったこと、知ることがなかったことは大変多く、広い視野でまんのう町のこども園の今やこれからのことを知り、考えることができたことは大きな学びであり、自分自身の成長につながっていると感じます。

また、学校訪問をする中で、その学校のよさを感じることができました。気持ちのよい挨拶ができる学校、笑顔の子どもの多い学校、エネルギーに溢れる授業をする先生がいる学校など、個性あふれる学校、児童生徒、先生方に会えることができました。さらに、一人1台端末が配布されることに伴うタブレットやソフトの購入、コロナ対策として自動水栓の設置、体育館のエアコン設置など、教育を陰で支えてくれている人の存在に気づくこともできました。子どもたちのため、現場で働く先生方のためによりよいサポートができるよう、自分ができることに精一杯取り組み、「わたしの花がふしぎと」ひとつひとつ ひらいて「※いくつかに努力していきたい」と思っています。



学校教育課 主任指導主事（小中学校担当） 丸野 千恵子
※坂村真民「念すれば 花ひらく」の一節

念すれば 花ひらく

今年4月よりまんのう町教育委員会で勤務することになりました。1学期の間は慣れない仕事に戸惑いながら、慌ただしく毎日が過ぎていきました。学校現場と違うこと、大きく3つ。
1 音がしない。とても静か。（周りも、そして自分も）
2 動かない。（デスクワーク中心）丸つけはしない。
3 おいしい給食がない。（毎日お弁当）
運動場や教室から聞こえる子どもたちの元気な声や歌声やリコーダーの音、次は体育館から運動場、その次は理科の実験室と校内をめぐり、動く動き回っていた時間、栄養満点でいつも温かかった給食、半年前までの生活を懐かしみ、落ち込む日もありました。今では「行政職」にも少しずつ慣れ、自分に与えられた今しかできない仕事をやる、行政職としてのスキルが身に付くようになって、パソコンと多量の資料に向かっています。

現場を離れて見えてくるものもあります。
1 こども園、小学校、中学校のつながり
2 学校や園ごとのよさ、先生方の個性
3 学校現場を陰で支える人たちの存在
私は小学校の教員をしていましたので、こども園の学びについてはあまり知りませんでした。園では子どもたちの反応を大切に、子どもの姿に合わせて教育を考えています。教科書のある小中学校とは違い、創り出していることに驚かされました。

また、学校訪問をする中で、その学校のよさを感じることができました。気持ちのよい挨拶ができる学校、笑顔の子どもの多い学校、エネルギーに溢れる授業をする先生がいる学校など、個性あふれる学校、児童生徒、先生方に会えることができました。さらに、一人1台端末が配布されることに伴うタブレットやソフトの購入、コロナ対策として自動水栓の設置、体育館のエアコン設置など、教育を陰で支えてくれている人の存在に気づくこともできました。子どもたちのため、現場で働く先生方のためによりよいサポートができるよう、自分ができることに精一杯取り組み、「わたしの花がふしぎと」ひとつひとつ ひらいて「※いくつかに努力していきたい」と思っています。

仲多度郡・善通寺市

小学生陸上記録会



10月6日：Pikaraスタジアム

昨年同様、無観客で実施された「仲多度郡・善通寺市小学生陸上記録会」。感染予防のため、開会式、閉会式は行わず、開会宣言により、一斉に各種競技が開始されました。

同じ学校の仲間たちがスタンドから応援の拍手を送る中、1戦1戦、力を尽くして戦う選手たち。コロナ禍の中での練習は大変だったことでしょう。トラックやフィールドでは、全力を出し切った子どもたちの輝く笑顔が見られました。

成績優秀者は、10月30日、11月3日に開催された「香川県小学生選抜陸上競技大会」に出場しました。



香川県小学生選抜陸上競技大会

(10月30日：Pikaraスタジアム)



6年女子走高跳

第3位 吉田 媛美（満濃南）
128cm



入賞者【第3位まで】

走幅跳

6女 ① 栗田菜々子（高篠） 395cm
② 小西 萌香（仲南） 373cm
6男 ③ 竹下 太基（仲南） 404cm

走高跳

5男 ② 中浦 小虎（四条） 113cm
6女 ① 吉田 媛美（満濃南） 124cm
② 黒木実惟菜（四条） 121cm
6男 ① 石崎 幸弥（仲南） 132cm
③ 河野 魁人（満濃南） 132cm

※試技数（跳んだ数）の差による

ジャベリックボール投

5女 ① 久保田志羽（満濃南） 33.60m
② 三宅 彩香（満濃南） 33.20m
6女 ① 寺嶋 穂莉（高篠） 39.82m **大会新**
③ 片山 結愛（高篠） 37.60m
6男 ② 今田 智大（高篠） 40.60m

80mハードル

6男 ① 原 陸人（四条） 13"80
③ 竹内 晴哉（四条） 14"10

100m

5女 ② 富井 夏鈴（長炭） 15"32
5男 ① 中西 一真（仲南） 14"41 **大会新**

4×100mリレー

5男 ② 仲南（藤田葵・横関奏亮・高橋瑛史・中西一真） 1'01"94
6女 ③ 仲南（土岐莉子・谷江一華・小西萌香・大岡香里菜） 1'01"21
6男 ③ 仲南（真鍋陽貴・石崎幸弥・竹下太基・藤本怜） 57"15

感染予防に配慮しながらの運動会。

まだまだ厳しい残暑の中でしたが、こども園児のかわいらしい演技や小学生が全力投球で頑張る姿は、参観者にさわやかな風を運んでくれました。



満濃南小・こども園(わくわく棟)



仲南こども園

秋の運動会を開催

長炭こども園(9/22)
満濃南小学校・こども園(わくわく棟) (9/23)
満濃南こども園(にこにこ棟) (10/2)
仲南こども園(10/9)

満濃南こども園(にこにこ棟)

長炭こども園

共感力の話

共感力とは、相手の立場に立ってものを考えられる力のこと。相手を思いやれる心のことです。

エピソード1

昭和の芸能界を代表する国民的俳優の一人に森繁久彌さんがいます。その森繁さんが、かつて目の不自由な子どもたちの学校を訪問した時のエピソードです。

子どもたちを前にして、森繁さんは「七つの子」を歌い始めました。

からす なぜ啼くの
からすは 山に
かわい 七つの子があるからよ
かわい かわいと からすは啼くの
かわい かわいと 啼くんだよ
山の古巣に行ってみてごらん

「まるで眼をしたいい子だよ」という歌詞を忘れてしまったのでしょつか。

いいえ、そうではありません。ひと呼吸おいて、森繁さんは次のように歌い出したのです。

まるい顔した いい子だよ

目の前にいる子どもたちのことを考えると、森繁さんには本来の歌詞をそのまま歌うことができなかったのです。

エピソード2

リオ、東京と金メダルに輝き、オリンピック2連覇を果たした柔道の太田将平選手は、その美しい「礼」でも有名です。勝利してもあからさまに喜ぶことはなく、対戦相手に敬意を払って深々と頭を下げる姿は、「礼儀正しさ」として中学3年の道徳の教科書（光村図書）にも掲載されています。それはまさに、「相手があつてこそ学ぶこと、試合をすることができのだから、相手となる人には特に礼をつくすべきだ」とする柔道の礼の精神を体現するものではないでしょうか。

大野選手は、あるインタビューの中で、なぜ勝利後に喜びを表現しないのかを問われ、「敗れた選手は勝った選手のガッツポーズを見ると、もう一度苦しむ。そこまで追い詰める必要はないのではないか」と語っています。

相手に礼をつくすとは、単に見た目の形だけではなく、敗れた選手の心の内を想像し思いやって、自分のありようを整えることができる、その心こそが何よりも大切だということをお話してくれているように思います。

大野選手の「礼」が世界を魅了してやまないのは、このように、形だけではない、対戦した選手への深い思いがあるからではないでしょうか。



中学道徳3年
「きみがいちばんひかるとき」
(光村図書) より

エピソード3

童謡「サツちゃん」で知られる、詩人である児童文学作家阪田寛夫さんの作品に、『鬼の子守唄』という詩があります。

これまで桃太郎の側から見ていたものを、反対の鬼の側から見てみると、物事はちがって見えてくるはずなんです。

鬼の子守唄

阪田 寛夫

鬼が島の鬼の子は
やっぱり夜ふけに泣くのです

こわいよ かあちゃん
桃太郎がきたよ
はちまきしめて
のぼりもたてて
ガッパ ガッパ
海からきたよ
ねんねよ ぼうや
桃太郎もねんねだよ
西の空まっくろけ
東の空まっくろけ
ガッパ ガッパ
こんやはさむい

平和を願って咲き続ける花の話

仲南小学校中庭の片隅に、ひっそりと咲くバラの花があります。

つぼみの時は真紅、花が開くと黄金色になり、ピンク色になって散っていく……そんな美しい花です。名前は「スヴニール・ドゥ・アンネ・フランク（アンネ・フランクの形見）」、日本では「アンネのバラ」という愛称で呼ばれています。

アンネ・フランクは、『アンネの日記』で知られるユダヤ系ドイツ人の少女です。第二次世界大戦で、ナチス・ドイツによるホロコーストの犠牲になり、15年の短い生涯を閉じました。このバラは、ベルギーの園芸家ヒッポリテ・デルフォルヘ氏がアンネを偲び、8年をかけて作り出した新種です。ホロコーストからの生還を果たしたアンネの父オットー・フランクに贈られました。



Souvenir d'Anne Frank
(仲南小の中庭に咲く「アンネのバラ」)

なぜ、「アンネのバラ」が仲南小学校に?

広島県福山市に「ホロコースト記念館」があります。

後にこの記念館を開館し館長となる大塚信さんが所属していた合唱団は、1971年、演奏旅行先のイスラエルで、アンネの父オットー・フランクさんと運命的な出会いを果たしました。そこから交流が始まり、1972年、オットーさんから友情の証として贈られた苗木が「アンネのバラ」だったのです。届いた10本のうち9本は枯れてしまいましたが、残る1本が奇跡的に生き残り、翌年の春、花を咲かせました。

その後「アンネのバラ」は接ぎ木によって増やされ、「戦争のない平和な世界に」というアンネの願いとともに日本各地に広がっていきました。

- 1995年、「ホロコースト記念館」は開館しました。
- 2003年、仲南北小学校の6年生が総合的な学習の一環でこの記念館を訪問しました。帰り際、館長さんにお願いして、苗木を2本もらって帰ったのです。2つの植木鉢にそれぞれ1本ずつ植えられた、細くて弱々しい苗木でした。
- その折に、館長さんと約束したことがあります。
- 「アンネのバラ」は、平和の大切さを伝えるために咲いている。その美しさや愛でるために、切り花にして気軽に人にあげたり、花瓶に生けて部屋に飾ったりするのはなく、平和の大切さを伝える使者として使ってほしい。
- 枯らさないように、大事に世話をしてほしい。大切にできないときは、返してほしい。

子どもたちは、学校に帰ってから苗木を花壇に植え、メッセージを伝える看板も立てて、大事に世話を続けました。自分たちが卒業するときは、次の6年生に世話ををお願いしました。

2006年3月、仲南北小学校は閉校となり、仲南東小学校、仲南西小学校とともに仲南小学校に統合されました。

その年、仲南小学校第1回の卒業生となる当時の6年生が「ホロコースト記念館」を訪問し、ホロコーストや「アンネのバラ」について学びました。そして、先輩の思いを引き継ぐため、仲南北小学校から看板とともにバラを移植したのです。

無事に命をつなぐことができた「アンネのバラ」は、今も平和を願いながら、仲南小学校中庭の片隅で咲き続けています。

人権教育は知的理解だけでは不十分であり、その場の雰囲気や環境といった、正式のカリキュラムとは別の「隠れたカリキュラム」が重要な役割を果たすと言われています。子どもたちの身近に咲く「アンネのバラ」は、その人権感覚を磨くうえで、正規の授業の中ではできない役割を果たしてくれているように思います。



今月の一枚

すてきなうち

満濃南こども園

編集後記

ポケットのなかには ビスケットが一つ
ポケットをたたくと ビスケットは二つ

こんなふうに始まるのは、まど・みちおさん作詞の童謡『ふしぎなポケット』です。この歌が発表されたのは昭和29年。戦後の日本はまだまだ貧しく、いくらでもビスケットが出てくるポケットは、おやつをおなか一杯食べたい子どもたちにとって、夢のようなポケットだったことでしょう。

なかに「ポケット」を「ポッケ」、「たたくと」を「たたけば」と歌う子どもがいて、まどさんは、「ポケット」と「ビスケット」は韻を踏んでいる、「たたけば」は響きが汚く、食べ物の歌なのにビスケットがまずく聞こえる、だから、きちんと詩のとおり歌ってほしい、と言ったそうです。何気なく並んでいるように見える言葉の一つ一つが、実は吟味され、唯一無二のものとして使われているのだと感ずります。

童謡は、子どもの歌だけれども「子ども向けの単純な歌」ではないというのが、まどさんの考えでした。この世のありとあらゆるものの「存在の不思議への叫び」が童謡なのだ、と。そして、自分の中に持ち続けている子どものまなざしで、驚いたり、うれしくなったり、がっかりしたり、「ほうっ」と感心したり…そこからこぼれ出た言葉がそのまま詩となり、童謡にもなってきたのです。

一方、童謡とちがって作詞者や作曲者のいない子どもの歌が「わらべうた」です。古くから、子どもたちの遊びのなかで、あるいは、大人が子どもをあやしたり寝かしつけたりしながら、歌い継がれてきました。わらべうたの持つ日本語特有の心地よいリズムと旋律に触れることは、絵本とならんで、「ことばのはじまり」、そして「文学の入り口」とも言われます。

赤ちゃんは、大人がわらべうたを歌いながら体に触れることで安心するそうです。また、幼児は、わらべうたで遊びながら、他者の気持ちや動きを感じ、互いに合わせようとしながら創り上げていく楽しさを味わうのです。

最近、子どもたちが童謡やわらべうたを楽しむ声や、子どもに話しかけるように歌う大人の声が、あまり聞こえなくなったと感じるのは、私だけでしょうか。

目にするものすべてが不思議に満ちている乳幼児期。その柔らかな感性の中でも、とりわけ、ことばの響きに対する感受性は素晴らしいと言われています。このような時期に、美しい日本語で表現された童謡やわらべうたが身近にあること、そして、それに親しむことは、とても大切なことのように思います。

(Y. T)

表紙絵：東山 正章（元満濃中学校長）

次号予告
(2月1日発行)

特集 「読書を楽しむ学校」をめざす

園・学校ウォッチング

満濃中学校・長炭こども園